100年前のピアノ復活

東中　生徒が修復活動、優雅な音色響く

プレイエルのピアノを演奏する山本貴志さん

東中（143人）は2日、同校体育館で文化祭「東祭」を行った。生徒たちが、約100年前に製造されたフランス・プレイエル社のピアノ修復に取り組んだ成果を発表。併せて長野市出身のピアニスト山本貴志さんによるピアノ演奏会を楽しんだ。

2月の校長講話をきっかけに、4月から総合的な学習の時間でピアノ復活のプロジェクトに全校生徒で取り組んできた。発表では、各チームがスライドや動画・ポスターセッションなどで活動を説明した。渉外チームはパリに本拠地がある音楽博物館のピアノ台帳を調べた。同校のピアノは1924年製造の「3bis（トワロビス）」モデルで、ローズウッド材でつくられたもの。同年2月29日に「東京のNAGAI」という人が7700フランで購入したことを解読した。

資金集めグループは校内で育てた花や野菜の販売、14カ所の企業・団体を訪問し寄付を募り、目標額の50万円を超える91万7350円を集めた。

プレイエルはショパンが愛用したことで有名。生徒はショパンに縁のある人に演奏をと、ショパン国際ピアノコンクールで4位に入賞した山本さんに依頼した。ショパン作曲の「雨だれ」、「英雄ポロネーズ」など6曲を披露。生徒保護者・寄付に協力した招待客約400人を迫力ある演奏で魅了した。

山本さんはプレイエルのタッチや音色について「素直で繊細なピアノ。心を込めて優しく扱うと透明感がでて、優雅な音色が聞こえる」と話していた。

2年生の小山葉澄さんは「演奏会を開くことができて良かった。山本さんの迫力ある滑らかな演奏は素晴らしかった」と感激していた。

100年前のピアノ復活へ

東中が全校で修理 〝新たな命を〟

東祭での演奏イベントに向け準備

東中学校（生徒143人）は本年度、同校にある約100年前に製造されたと推定されるフランスのPLEYEL（プレイエル）社製グランドピアノの音色を復活させるプロジェクトに取り組んでいる。6月27日は、調律師の指導で生徒たちもピアノの修理作業に励んだ。秋に開く東祭で演奏ができるよう準備を進めている。

プロジェクトは、今年2月の校長講話をきっかけに始動した。「PLEYELのピアノにいのちを吹き込む」をテーマに掲げ、総合的な学習の時間に▽イベント企画▽資金集め▽情報発信―の3グループに分かれて活動している。

ピアノは同校が開校する直前の1958（昭和33）年、当時の仁礼村南部中学校に仁礼町出身の実業家山岸右京さんが寄贈。同窓生によると、20年ほど使用されていないという。現在まで校舎1階の日の当たらない場所に展示されていた。

プレイエル社は1807年に創業したフランスのピアノメーカー。軽いタッチや豊かな音でショパンが愛用したとされる。プレイエルのピアノ台帳で同校のピアノの製造番号を調べたところ、1920年代に製造されたものだと分かったという。

この日は、調律師と共にピアノの分解や清掃作業をした。生徒が担当できる部分は交代しながら全校が携わった。屋根、ペダル、鍵盤、譜面台などのパーツを外し、雑巾で丁寧に拭いた。鍵盤を拭いた生徒は「見た目では分からない汚れが多くてびっくりした」「汚れている部分が多く歴史を感じる」と話していた。

専門的な知識や技術が必要な部分は後日、調律師が修理作業を担う。譜面台の欠けているパーツは生徒が製作する予定だ。

分解・清掃班班長の田中萌々子さん（3年）は「全校生徒が修理作業に関われてうれしい。音の不調などが無くなり、音の響きが良くなったらいい」と期待していた。

島田浩幸校長は「さまざまな問題意識を持ち、主体的に動く姿は素晴らしい。母校にあるものに触れたり弾いたりして、歴史を感じ取ってほしい」と話していた。

生徒たちはピアノ修理のほか、修理費捻出のために花を育てて販売したり、演奏会の計画やチラシ作りなども進めていく。

2人1組で鍵盤を拭く生徒たち。隅々まで丁寧に磨いた

ピアノの鍵盤を分解する調律師